

自家骨軟骨移植術にてスポーツ復帰を果たした シニアスポーツ愛好家の1例

○藪本 浩光 (やぶもと ひろみつ), 中川 泰彰, 山田 茂, 向井 章悟, 向田 征司, 二宮 周三,
坪内 直也, 松岡 将之, 樽見 映里, 中村 孝志

国立病院機構 京都医療センター 整形外科

変形性膝関節症の長期変化を予防するために、骨軟骨損傷部を良好な形状適合性のある硝子軟骨で修復することが重要である。今回われわれは、膝蓋大腿関節の軟骨損傷を伴ったシニアスポーツ愛好家に自家骨軟骨移植術を施行し良好な結果が得られたので報告する。症例は74歳女性、2年半前に右膝内側半月板後節から後角にかけての水平断裂に対し部分切除術を施行した。その際の膝蓋大腿関節の軟骨状態は、膝蓋骨 ICRS 分類1度、膝蓋骨溝中央部に5mm×20mmの2度であった。その後、右膝痛は軽快し登山によく出かけていたが、徐々に右膝痛再発あり、半月板切除後1年で再鏡視を施行した。その際、膝蓋骨内側に10mm×20mmの4度軟骨損傷と、それに対する膝蓋骨溝内側に7mm×7mmの4度損傷を新たに認めた。よって、3か月後に自家骨軟骨移植術を施行した。膝蓋骨内側病変部に直径8mmの骨軟骨柱2本を移植、膝蓋骨溝内側に直径8mmの骨軟骨柱1本を移植した。術後は2週間免荷とし、術後6週より全荷重歩行を開始、術後5ヵ月より登山に復帰した。術後1年での再鏡視で、採取部は線維性軟骨様組織で被覆されており、移植骨軟骨部は生着し、平滑な関節面が形成されており、ICRSの再鏡視点数は10点であった。疼痛はvisual analogue scaleで0点となっている。病巣が限局している場合、シニアスポーツ愛好家においても自家骨軟骨移植術は有用な治療法と考えられた。